

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.4〉

〈見初① 特徴〉

炭鉱と共に発展、結束は固く

見初地区は市の南東部に位置し、宇部市街地の東の玄関として、さらには東部臨海工業地帯の中心地として発展した。国道190号(松山通り)が東西に横断し、周辺部には商業地域、西側には工業地帯が広がる。



ヤシが立ち並ぶ「フェニックス道路」

「溝埋」が地名の由来か



見初

基本データ

- 面積2.00平方キロメートル (22位)
- 世帯数1843世帯

明治期から海岸付近の炭鉱と共に栄えたが、太平洋戦争中の空襲で一帯は焼け野原となった。戦後、復興の都市計画の一環として松山通りが幅36メートルに拡張、1961年には中央分離帯に250本のフェニックス(ヤシ)が植樹され、灰の中からよみがえるという思いを込めた「フェニックス道路」として、宇部市緑化のシンボルとなった。

「見初」の名の起りには諸説あるが、炭坑から掘り起こされたボタで埋めた「溝埋(みぞうめ)」を由来とする説が広く伝わっている。旧宇部村時代の見初は、白砂青松の海岸と青い海に面して丘と畑が広がる半月型の土地だった。

- 人口3189人 (17位) (男1499人、女1690人)
- 高齢化率42.6%
- 小学校児童数105人
- ※世帯数などは2022年4月1日現在

江戸時代中期までさかのぼると、海岸線は現在のJR宇部線より山手側になり、今の土地のほとんどが海。明治以降に炭坑の廃土で埋め立てられ、着々と海面へ陸地を広げていった。

海岸通りより海側の臨海工業地帯は、37年以降の埋め立て造成地。近代の石炭採取以前に、周辺を覆っていた浅い川や沼地を埋めたことも「溝埋」の由来の一つとも考えられている。

面積は2平方メートルと市内で3番目に小さい。昭和の初めごろまでは東西南北が現在よりも広い長方形の区域で、琴芝小の開校に伴い、57年に校区域の変更を受けて現在の形に狭まった。市街地にあ

りながら人口は少なく、高齢化率も10年前と比べて10ポイント増の42.6%と高い。

一方、炭鉱時代から受け継がれる開放的な土地柄に加え、住民たちは助け合い精神が旺盛で地域活動が盛ん。年間を通じて、地域づくり協議会(伊妻孝文会長)を母体とする多くの団体が多彩な行事を計画し、地域に愛着を持つ心と心のふれあいを大切に次世代の教育に情熱を注いでいる。歴史は浅く、大昔からの華やかな歴史を物語る舞台などは無いが、先人たちが築いてきた暮らしの努力を伝え、受け継ぐこと、一人一人が自分の役割を認識し「オール見初」で地域課題に取り組む住民たちの結束は固い。